

逝去された名誉会員等への追悼文

前田和甫先生を悼んで



1929年 8月12日 生まれ
 1955年 東京大学医学部卒業
 1961年 東京大学大学院卒業
 東京大学医学部助手
 1966年 東京大学医学部講師
 1967年 東京大学医学部助教授
 1975年 東京大学医学部教授
 1990年 帝京大学医学部教授
 1995年 東京家政大学教授
 2000年 退職
 東京大学名誉教授

日本公衆衛生学会名誉会員 前田和甫先生が享年85歳でご逝去されました。先生は、1955年に東京大学医学部医学科をご卒業になり、同医学部放射線健康管理学講座助手、疫学講座講師、同助教授、公衆衛生学講座助教授を経て、1975年に東京大学医学部保健学科疫学講座（現健康総合科学科疫学・生物統計学教室）教授に就任されました。1990年に定年退官されるまで、15年の長きにわたり、我が国における疫学研究・教育の先駆けとして、その発展にご尽力をされました。東京大学退官後は帝京大学医学部教授、東京家政大学教授を歴任されました。

先生の研究における基本テーマは、疫学手法を用いた環境保健分野における課題解決への取り組み、特に行政的・社会的な課題への貢献にあったといえます。一時、厚生技官の道に進む希望を持たれていたと伺ったことがあります。目ざすところは共通していたのではないかと思います。国際環境疫学会の設立が1987年ですので、「環境疫学」という研究分野は1970年代には未だ確立していなかったといえますが、先生は当時「環境疫学」を志向していたといえます。東京大学最終講義の記録を読み返しますと、保健学科における研究・教育が目ざすものとして「保健の科学」を紹介され、その展開の場として環境保健を取り上げられています。具体的な場面としては、環境基準の設定、有害物への曝露のために多数の人に健康被害の発生が予測される時の対策の提供、及び同様な事例が法廷で争われる時の疫

学的証拠の提出の3つを提示されています。実際に、先生は大気汚染物質の環境基準設定に関わる専門委員会委員として活躍され、大気汚染物質の健康影響に関する疫学研究の企画・実施、さらに大気汚染物質の健康被害に関する訴訟に関わられました。また、放射線管理学講座の助手をされていたこともあり、原子力や放射線疫学についてもずっと関心を持ち続けておられました。そのこともあり、東日本大震災後の福島状況については大変心を痛めておられました。

教育者としての先生は、教室員の研究テーマを一方的に決めるのではなく、研究の進め方についても自主性を重んじていました。私自身も、論文の草稿を見ていただいた後に、この結論は大丈夫だなと念を押されたことはあっても、これをやれとか、これはやるなと指示された記憶はありません。放任主義といってもよいぐらいだと思いますが、一方でサポートが必要と思われる場合には、親身になって相談にのり、学生の就職のために医学の枠を超えた分野にも活動を広げられていました。先生を指導教官として大学院を卒業して、研究者の道に進んだ同窓生はたくさんいますが、その専門分野は多様性に富んでいます。自らの関心の中核にあったと思われる環境分野に進んだ者は必ずしも多くありませんが、これも自らの方針に従った結果ではないかと思われれます。東京大学医学部保健学科疫学講座では初代教授山本俊一先生の代から疫学における統計学の役割を重視しており、引き継いだ前田先生の代でも生物統計学・医学統計学を研究分野とする教室員がたくさんいました。この領域は工学のご出身である後任の大橋靖雄教授時代に大きく花開き、医学統計の分野に多くの人材を輩出することになりました。もちろんこれは大橋教授の功績によるものですが、研究の自由と自主性を重んじた前田先生のお考えがどこかに流れ続けていたのではないかと感じます。

先生が追求された「社会の役に立つ疫学」を今後実践していくことを最後に誓いたいと思います。ご冥福をお祈りいたします。

国立研究開発法人国立環境研究所
 新田裕史

石戸先生との出会いを偲んで



1918年 1月1日 生まれ
 1941年 東京帝国大学医学部卒業
 1942年 軍籍 その後日赤、宮内
 庁病院等
 1955年 埼玉県浦和保健所
 1957年 埼玉県行田保健所長
 1959年 埼玉県所沢保健所長
 防衛庁衛生局衛生課

1962年 防衛庁衛生局衛生課長
 1963年 宮城県衛生部長
 1967年 岐阜県衛生部長
 1970年 国立がんセンター運営部長
 1972年 ㈱相互生物医学研究所取締役所長
 1975年 ㈱相互生物医学研究所取締役副社長

私が初めて石戸先生にお会いしたのは岐阜大学医学部公衆衛生学教室の抄読会のときであった。当時の担当教授は今亡き館正知先生であり、この時に石戸先生を岐阜県衛生部長として、教室員一同に紹介してくれたのである。石戸先生が岐阜県に赴任されたのは昭和42年8月であったが、私は昭和40年4月に岐阜県に採用されたから、岐阜県職員としては、位が低い、先輩である。その後、石戸先生は昭和45年6月に厚生省国立がんセンター運営部長としてご榮転してしまった。

この間、約3年間という期間であったが、私は石戸先生に公私共に大変なお世話になった。

その1 私は昭和39年の卒業直後に館教室に入局し、教室の抄読会へはよく出席していた。1年後、岐阜県（衛生部医務課兼高山保健所予防課）勤務となってからも、抄読会には真面目に顔を出していた。そこへ衛生部長が紹介され、今後、可能な限り抄読会に出席するというのである。教室員にとっては、年齢も位も格段に上の方が、実行できるわけがないと思っていたのだが、いざ始まってみると、まさに有言実行であり、その熱心さと知識の豊富さには驚かされどうしてであった。特に英語の実力においてはとても敵うものではなかった。確か、石戸先生が推された英文論文を教材にしたこともあったほどである。

その2 石戸先生は、館教室の面々（若者集団）を大切に思って下さり、時々、抄読会の後に抄読室で一杯やったのち、岐阜市最大の繁華街（柳ヶ瀬）に繰り出すこともあった。そして、たまには調子にのって石戸先生を、あまり品の良くないバーへ案内することもあったが、先生はそんな店にも付き合っただけで、案内した方が恐縮するばかりであった。しかし、あの先生特有のむっつり顔はそのままでも、何となく雰囲気を楽しんでおられたような気がする。

その3 そんな訳で、私は石戸先生とは、結構、気の許せる仲になっていたと思う。ある時、石戸先生の自宅（公舎）に誘われ、初めてお目にかかった奥様のすばらしさにびっくりさせられた。さっそくお酒や料理をいただき良い気分になったところで、奥様から手渡されたのが見合い写真であった。その後も時々お見合い写真を渡されることはあったが、結局、結実までには至らなかった。しかし、そのプレッシャーもあってか、他の縁で私は今の妻と早々に結婚することになったのである。結婚披露宴の主賓は、勿論、石戸夫妻である。

その4 私は昭和46年7月に厚生省（医務局国立療養所課）に出向することになったが、この背景には石戸先生の計らいもあったのではないかと考えている。石戸先生のご指導のもと、岐阜県衛生部では比較的のびのびと活動できたし、こんな若者を中央で鍛えてやろうという親心もあって、中央入りに手をかしてくれていたのではないかと考えている。ありがたいことである。

さて、石戸先生は私が入省後間もなく、国立がんセンター運営部長を退官され、昭和47年7月、㈱相互生物医学研究所（BML）取締役社長に就任されたが、約3年間社長を務められた後も、この会社の顧問となり、現役時代も含めて、長年、この会社には不可欠の重鎮として君臨されたのである。

この間も、私は上福岡市に構えられたご自宅を訪問したり、個人的な頼み事をしたり、何かとお世話になったものである。実に存在感のある先輩であった。

石戸先生、ありがとうございました。

日本公衆衛生学会名誉会員
 松田 朗